

# 不登校の今に迫る

杉本 拓哉

(黒木 雅子ゼミ)

## 目次

はじめに	
第1章 不登校の変遷	
1-1 学校恐怖症——戦後復興から高度経済成長 (1940年～1970年代)	
1-2 学校荒廃——校内暴力・少年犯罪・いじめ (1980年代)	
1-3 不登校——心の教育(1990年代～2000年 代以降)	
第2章 不登校のきっかけ	
2-1 不登校のきっかけ	
2-2 不登校生徒追跡調査報告	
第3章 不登校の支援	
3-1 京都市教育委員会の取り組み	
3-2 不登校を経験した子どものための中学校	
3-3 不登校の今に迫る	
おわりに 一不登校として生きる	
参考文献	

## はじめに

前略 矢吹丈様

あなたは真っ白に燃えつきて死んでいきました。

あなたは真っ白に燃え尽きて笑顔を浮かべながら死んでいきました。

僕もあなたのように笑顔を浮かべながら死にたいと想っています。

僕もあなたのように生き急ぎ、真っ白に燃えつきたいと想っています。

だけど今の僕には、まだ何をすればあなたのように真っ白に燃えつきることができるのか解りません。

今の僕には、何を手に入ればあなたのような

素敵な顔で死ぬことができるのか解りません。

だから僕は今ここで、それをずっと探しているところです。

僕は今、ここでそれをずっと探しているところです。

僕は今、あなたの人生でいうと、まだドヤ街にもたどり着いていないところです。

僕は今、あなたの人生でいうと、たぶん孤児院からもまだ抜け出していないところでしょ。

だけど。

だけど僕は真っ白に燃えつき笑顔を浮かべて死ぬのです。

あなたのように。

僕にはまだ笑顔を浮かべながら死ぬるリングがどこにあるか解らないけど。

僕にはまだ笑顔を浮かべながら死ぬるリングで行うBOXINGがいったいなんなのか解らないけど。

僕がこの部屋から抜け出しドヤ街にたどり着いた頃また手紙を書きます。

千原浩史

(千原ジュニア著『14歳』より)

この文章は、千原が人生のバイブルと語る漫画「あしたのジョー」の主人公・矢吹丈へと送った手紙である。「あしたのジョー」とは、講談社の『週刊少年マガジン』に1968年から1973年にかけて連載された高森朝雄(梶原一騎)原作、ちばてつや作画のボクシング漫画である。

千原ジュニアは、日本のお笑い芸人である。1974年3月30日、京都府福知山市生まれ、本名・千原 浩史(ちはら こうじ)。1989年に、実兄・靖史(せいじ)とお笑いコンビ「千原兄弟」を結成。2017年1月現在、テレビで見ない日はないほどの売れっ子である。小学生の頃、やんちゃ坊主だった浩史少年は、友達の親から好く思われて

いなかった。この人達を見返す為に、地元では一目置かれる中学校へ進学すべく受験をし、見事合格した。しかし、彼からすれば入学することがゴールであり、燃えつき症候群となる。その後不登校になり、部屋に引きこもってしまう。15歳の時、4つ上の兄に連れられてお笑い養成所へ出向くことになる。それは、高等学校へと通う選択肢ではない。15歳から社会に出て、お笑い芸人として生きるという道だった。彼自身が探していた、戦うリングがそこにはあったのだ。

文部科学省の学校基本調査によると、不登校とは、年間30日以上欠席した児童生徒のうち、病気や経済的な理由を除き、「何らかの心理的、情緒的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること」に該当する場合を指す。学校によっては異なるが中学校の年間出席日数は、180～200日である。極端な話、年間で毎月3日ずつ休むと不登校の項目に該当され兼ねない。そう考えると、定義されている「年間30日以上欠席」は案外少ないようにも思える。「不登校」になるきっかけは「いじめ」、「学業不振」、千原ジュニアのように燃え尽き症候群（バーンアウト）など様々である。現在、不登校については、次の一步を踏み出す成長の道具だとして認識されつつある。「学校のこと」「友達のこと」「家族のこと」などで、行き詰まったり、傷ついている自分を守り、もう一度整え、自分を見つめなおし、成長する中で子どもたちは不登校を体験している。本論では、不登校はどのように形を変えたのかを問題提起として掲げる。次章では、日本教育の変遷を辿り、時代によって不登校がどのように変化したかについて触れていく。2章では、文部科学省の調査データをもとに、不登校のきっかけについて考察する。3章では筆者が行った聞き取り調査などの一次データをもとに不登校支援の実例と不登校児のための中学校を紹介しよう。

## 第1章 不登校の変遷

本章では、山田恵吾著『日本の教育文化史を学ぶ 時代・生活・学校』（pp196-257）を基に考察していく。

### 1-1 学校恐怖症——戦後復興から高度経済成長（1940年～1970年代）

日本では戦後、6・3・3（小学校6年・中学校3年・高等学校3年）制の単線型学校制度が確立し、9年の無償義務教育、教育委員会制度の導入、男女共学の実施、高等教育拡大などの改革を進め進学の手がかりが開かれた。敗戦後の日本は疲弊混乱や衛生環境の低さにより、経済的な理由や病気で学校へ行けない子どもたちがたくさん生まれ、これらは長期欠席と呼ばれていた。「もはや戦後ではない」と言われるようになった1950年代後半、経済復興や衛生環境・医療水準の向上により長欠率が減少する。しかしその矢先、まったく新しいタイプの長欠現象「学校恐怖症」が出現するのである。

1955年頃（昭和30年代）、①病気でもなく、②経済的な理由でもなく、③親が教育への無理解・無関心なのでもなく、④本人に勉強意欲がないわけでもなく⑤ひどいいじめなどの具体的なトラブルも見あたらない、原因不明の登校できない子どもたちが都市部を中心に出現した。学校を休んでしまう理由が、本人すら説明できない状態は不可思議かつ非合理だった。そこで、欧米の研究にならない、この学校にいかない（いけない、いきたくない）事態は「学校恐怖症（school phobia）」と呼ばれるようになった。当時、この原因は、「本人が悪い」とする個人病理として解決せざるを得なかった。学校恐怖症は、長期欠席が社会全体から大きく減っていくなかで生じた、ごく例外的なマイノリティの現象だった。

1965年頃（昭和40年代）、高度経済成長の時代へと移行する。日本人の生活基盤が大きく変化した。「三種の神器」とよばれた電気冷蔵庫、電気洗濯機、テレビは、家事労働の軽減化と余暇の増加をもたらした。日本人生活を大きく変えることとなった。特にテレビは1958（昭和33）年には10.3%だった普及率が1963（昭和38）年には88.7%と5年のうちに急速に日常生活の中に入りこみ、娯楽メディアの主役として君臨した。

教育では、1950（昭和25）年に42.5%であったに高校進学率が1974（昭和49）年について90%を突破し、1979（昭和54）年には94%まで上昇した。1955（昭和30）年には10.1%だっ

## 不登校の今に迫る

た大学・短大進学率（大学・短大進学率は、3年前の中学校卒業者に占める比率）も、1975年には38.4%と大きく上昇した。そして、1970年代半ば、「大衆教育社会」が完成したのである。「大衆教育社会」とは、教育が量的に拡大し、多くの人々が長期間にわたって教育を受けることを引き受け、またそう望んでいる社会のことである。また、教育の大衆的拡大を基盤に形成された大衆社会であり、メリトクラシーの価値が大衆にまで広く浸透した社会を意味する。メリトクラシー（meritocracy）とは、個人の才能や努力、業績によって人々の選抜が行われる社会制度のことであり、人が「何であるか」ではなく、「何ができるか」「何ができたか」が重要な選抜の基準となる。家系や縁故、身分などで社会的地位が決まっていた近代以前の社会と対比される。つまり、だれもが教育を受けられるようになり、また受験によって生まれかわることができる。この考え方が浸透していき、学歴社会の波が押し寄せることとなる。

表1 産業別割合の推移

	1955	1965	1975	1985	1995	2005
第一次産業	41.1%	24.7%	13.8%	9.3%	6.0%	4.8%
第二次産業	23.4%	31.5%	34.1%	33.1%	31.6%	26.1%
第三次産業	35.5%	43.7%	51.8%	57.3%	61.8%	67.2%

(出典)総務省統計局「国勢調査」をもとに筆者作成

都市サラリーマン階層にはじまった進学熱（受験戦争）が、第一次産業階層にも急速に広がっていた。産業構造の転換（表1）によって、わが子に家業を伝えることがしだいに難しくなった第一次産業就業者にも広がっていったのであろう。高学歴志向が一般化する時代に入ったのである。この時代背景のなかから、過熱した受験戦争や塾通いが子どもたちの心にストレスを与え、それが不登校を招くとする見方が生まれてきた。しかし、学習院大学教授の滝川一廣は、『リーディングス日本の教育と社会⑧ いじめ不登校』の中で、この見方に反論を述べている。

図1. 高校進学率

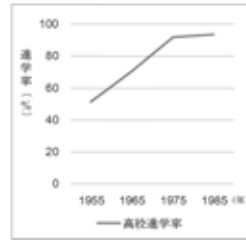
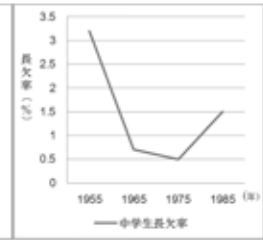


図2. 中学長欠率



(出典)滝川一廣『学校へ行く意味・休む意味 不登校って何だろう?』をもとに筆者作成

高校進学率（図1）と中学長欠率（図2）では、進学率上昇とちょうど逆相関する形で長欠率が下降しているのがわかる。高校が努力次第でみなが入れるようになってきたこの時代、進学という夢と展望は、子どもたちの心を能動的に学校へ向ける新しい力となり、長欠率を押し下げたとみるのが正しい現実認識ではなかろうか。養育が手厚くなったことに加え、この年代の思春期が具体的に将来を考え、生きた努力目標をもつことができ、閉塞感を強いられる子どもたちが大きく減ったのだろう（滝川 1998 pp234-236）。

2016年11月8日筆者は、京都で開催された「不登校フォーラム」に出席した。そこで一人の女性と出会った。60代とみられる彼女は不登校になった原因を詳しく語った。母が教育熱心で、また長女だったということもあり学歴社会、そして受験戦争の波にのまれていった。習い事もさせてもらえずひたすら勉強だけ強いられた。しかし、「勉強ができない自分」と「親の期待に応えられない自分」の心のバランスがかみ合わないまま、進学高校受験へと向かい、不合格となってしまった。それから50年間引きこもりを続けた。引きこもり生活から抜け出すきっかけは、地元の九州から京都へと単身で移り住んだ時のことである。自分以外にも同じ悩みや境遇の人がいたことで、自分だけが特別ではないと知ったときに包み込まれた闇に光がさした瞬間だった、と涙を流しながら訴えた。現在では支援者として社会貢献活動をしているという。

滝川のいう輝かしい未来を期待し、受験戦争に勝ち得た子どもは、社会から見える子どもであ

る。それに対し、社会が作り出した大きな圧力に負けてレースからはじき出されてしまった「不登校フォーラム」で出会った女性は、社会から見えない子どもでもある。見えない子どもたちはメディアに現れることはない。「負け犬」として声に出すことも許されない。そんな、見えない子どもはこの時代の不登校を象徴する存在ではないだろうか。

また、テレビが最大のマスメディアだったこの時代は情報の流れが一方通行だった。そのため、影響力はすさまじく受験戦争を煽るような報道は、学歴社会の世の中を作り出した要因の一つではないかと考える。これまでのメディアにはない映像と音声という強い刺激性は、一方的な強い指向性を作りあげることができる。受け手側からすれば強いインパクトを受ける。テレビの向こうで勉強している子どもたちを見るとそれ以上に自分も頑張らないといけない。それが連鎖して「受験フィーバー」を生み出したのではないだろうか。

## 1-2 教育荒廃——校内暴力・少年犯罪・いじめ (1980年代)

大衆教育社会が成立し、大半の子どもたちが義務教育を受けるだけでなく、高校等に進学するようになると、「みんなが進学しているから私も進学しなければ」と意識せざるを得ない状況が生まれてくる。保護者や教師は子どもたちの高校等への進学を自明視するようになり、進学しない子どもたちは周囲から問題視され「落ちこぼれ」とよばれる。学校の価値が肥大化し、勉強ができる子どもできない子ども勉強が好きなきも嫌いな子ども誰もが進学することを迫られ、学校がいわば「強制進学場」となってしまったのである。このような状況の中、子どもたちの中に学校に対する不満や不信感を抱く者が現れ、次第に子どもたちの逸脱行動が全国で頻繁に見られるようになる。学校に対する子どもたちの反抗的行動として校内暴力が目立ち、学校が荒れ始めたのである。校内暴力は、1970年代半ばから各地の中学校で発生し始め、80年代に入って急激に増加した。

そして、1980（昭和55）年11月に社会がもたらした弊害ともいえる少年犯罪が起こる。神奈川県金属バット両親殺害事件である。これは、川崎市

の自宅で、大学受験2浪（当時20歳）が就寝中の両親を金属バットで撲殺した事件である。東大卒の父からのプレッシャー、エリートの兄と比較され続ける日々、有名中学・有名高校に進学したものの大学受験に失敗しており、犯罪を引き起こすきっかけは受験勉強の重圧にあったとされる。受験戦争が深刻化していた当時あって世間を震撼させた。校内暴力や少年犯罪の頻発という事態に対して、全国の多くの学校では生徒指導の態勢を強化した。一部の学校では、厳しい校則や体罰による厳格な生徒指導がなされた。これが保護者やマスコミから「管理教育」と批難を浴びることになる。ともあれ、1984（昭和59）年以降、校内暴力はいったん沈静化に向かい、今度はこれに代わっていじめが新たな社会問題となっていく。

1986（昭和61）年2月にいじめがクローズアップされる事件が起こる。東京都中野区で起きた男子中学生（以下Sくん）が、盛岡駅前のデパート地下公衆トイレで、首を吊って自殺しているのが発見された。小柄だったSくんは下校時にバッグを持たされたり、買い食いのために店に走ったりいわゆる「パシリ（使い走り）」にされるが多かった。暴力をふるわれたりモデルガンの標的にされたりと、いじめは次第にエスカレートしていく。そして、「葬式ごっこ」が起こる。クラスではSくんを死んだことにして教室で花や線香をあげ、「追悼」の寄せ書きまで作製した。黒板の前には少年の机が置かれ、遺影と見たてて写真と牛乳ビンにさした花も置かれていた。同級生のみならず担任ら4人の教師まで参加していた。その後、Sくんはいじめを原因に自殺した。遺書には「俺だってまだ死にたくない。だけどこのままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ」と書かれていた。この陰湿ないじめはマスメディアで大々的に報道された。いじめという問題が表面化して世間を賑わすのは上記の事件のように、いじめと自殺が結びついた場合がほとんどである。被害者が自殺しなければいじめの事実が明るみにならない。校内暴力など他の逸脱行動とは異なり、いじめは可視性が低く、その実態を把握することは非常に困難である。では、1980年代の不登校はどうだろうか。

## 不登校の今に迫る

(図1)を見れば、ほぼ全員が進学して(できて)当たり前の社会が実現したのがわかる。そうなれば進学は、もはや子どもたちを能動的に学校へ向かわせる力を失うのである。進学は夢と希望に支えられた主体的な目標という意味をなくし、色褪せた「あたりまえ(半義務的な)コース」に過ぎなくなり、万一失敗すればマイノリティに脱落する不安だけが残るようになったためである。一方、(表1)を見ると、1975年代に第三次産業の人口がついに全体の50%を越え、さらに上昇を続けており、高度消費社会に入ったのである。学校(公教育)制度が目標としてきた以上に豊かな社会が全国規模で浸透してきた。子どもたちがなんらかの負荷や違和を学校生活に抱いたとき、それをおしてまで登校を続けさせるだけの重要不可欠性や絶対性を学校がもたない社会になった。(滝川 1998 p237)。

1970年代以前の学校は、子どもたちの将来を保証し、人生を豊かにするための重要な場として輝きをもった存在であった。しかし、1975年後半から80年代にかけて「教育荒廃(学校病理)」として、校内暴力やいじめのように学校教育にかかわる問題が構造的に生じてきた。強制的な進学を親に押し付けられ「落ちこぼれ」の烙印を捺された青年。「管理教育」により暴力行為が見えない形「いじめ」と変化し、それにより自ら命を絶った少年。社会から見えない子どもたちは事件や自殺として現れた。そして、それらは現在でも無くなることはない。では、不登校当事者の実情は、40年前から変化しただろうか。日本で唯一の不登校・ひきこもり専門紙として発行されている不登校新聞がある。これは、「当事者に寄り添う」をモットーに1998年に創刊された。以下の記事は、不登校経験者である2人が対談したものである。1人は、小学校高学年の頃学校に行き渋り、中学校からは不登校を経験、現在は通信制の学校に通う10代の女性である。もう1人は高校を不登校で中退し、その後20代は長期間引きこもり、現在はフリーターの50代男性である。この対談後に当新聞の編集長が不登校の実情を綴っ

ている。

(『不登校はどう変わった? 10代と50代による当事者対談』を終えて)不登校を経験した10代と50代2人が、不登校をしたときに感じた思いは、「学校に行かなければと思うが、行けなくてつらい」「不登校後、どう生きていったらいいかわからない」と口をそろえて言った。こうした思いに苦しんできた。長い時間を隔てている2人が、なぜ不登校をしたときに同じような思いを抱えたのか。これは「学校が50年間、変わらなかった」ということ。学校に通った者だけが社会で認められる。それが不文律であるがゆえに外れた者は不安感や焦りを感じざるを得ない(不登校新聞 2016.10/11)。

高度経済成長、そして高度消費社会、現在では情報化社会と変容してきたが、当事者の悩みや苦しみは変わらない。「あたりまえのルート」という学校へ行くことの重要性は失いつつあるが、学校に行かないものは道徳的に悪だとされる現状は変わらないのである。一方で1992年、ついに文部科学省が「不登校はだれにでも起こりうる」という声明を発表した。

### 1-3 不登校——心の教育(1990年代～2000年代以降)

1980年頃までの社会には、不自由さ、不便さをもたらず「枠のある自由」があった。行事や見守り、世話など地域とつながり活動することで、自分や相手のことを理解する機会が持てたのである。その一方で、1990年頃からは、コンビニやゲームなど、便利快適な生活が拡がり始めた。この頃から、子どもたちが身を置く社会の状況が少しずつ変わりだす。2000年以降はインターネットが普及した。2010年以降はスマートフォンが台頭し、情報化社会へと変容した。人と直接関わらなくても「つながる」ことができる時代となった。家族と一家団らんで食事をするのが減り、隣人はどんな人が住んでいるのかも分からず、社会はスピードと結果(即戦力)を求める。結果子どもたちは、命を身で感じる事が難しくなり、社会

の中で普通に他人と交わり、共に生活していく能力（ソーシャルスキル）が低下した。それが背景として、不登校が増えたのではないかと1996（平成8）年第15期中央教育審議会第1次答申では、述べられている。

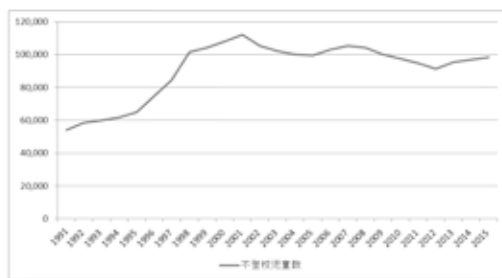
現代の日本社会は物質的に豊かになったものの、人間関係が希薄化する傾向にあるという問題、家庭や地域社会における教育力が低下しているという問題、学校が子供たちの多様な実態に十分対応できていないという問題など、様々な問題を抱えている、そうした中で、子どもたちについては、生活体験・社会体験・自然体験・異年齢者との交流、正義感や遵法精神等の基本的な倫理観が十分養われていないのではないか、自己抑制力、自立心等の生活態度にかかわるしつけが十分なされていないのではないか、ストレスを抱えているのではないか、など様々な問題が懸念されており、これらがいじめ。登校拒否の問題背景として浮かび上がってくる（中央審議会1996）。

また、同答申ではこれからの学校教育の在り方として「ゆとり」の確保と「生きる力」の育成という理念を掲げた。「生きる力」を「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」と定義した。「ゆとり」の中で「生きる力」の育成を目指すという観点から、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底、「総合的な学習の時間」の設置、完全学校週五日制の導入などを提言した。これらの教育理念を受けて、1998年12月に小・中学校の学習指導要領が改定され、「ゆとり教育」がより本格的なものとなっていった。一方で教育現場では教師たちが子どもたちの「こころ」にアプローチし、「こころ」をきちんと理解することを重視する風潮が次第に高まっていった。そのきっかけとなったのが、「神戸連続児童殺傷事件」である。

1997（平成9）年、2月から3月にかけて神戸

市で小学校の女子児童4名が金槌や刃物で襲われ、このうち1名が亡くなった。さらに同年5月には、同市須磨区の市立中学校の校門に切断された男子児童（小学6年生）の頭部が置かれているのが発見された。遺体男児の口に、「さあ ゲームのはじまりです…ボクは殺しが愉快でたまらない 人の死が見たくて見たくてしょうがない…」との紙片が添えられていた。また、「透明な存在であるボクを造り出した義務教育、義務教育を生み出した社会に対する復讐も忘れてはいけない」と犯行声明文を地元新聞社に送りつけており、「酒鬼薔薇聖斗」と名乗ったこの犯人は中学3年生の男子生徒であった。この事件を受けて、1998（平成10）年には、中央教育審議会が答申「新しい時代を拓く心を育てるために——次世代を育てる心を失う危機（『心の教育』答申）」を提出した。道徳の時間を有効に生かすことや問題行動への毅然とした対応などを提言した。また、1995（平成7）年から実施されていたスクールカウンセラー（後述）の配置が促進されていった。

図3. 不登校児童数の推移



〔出典〕文部科学省「平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」をもとに筆者作成

しかしながら、不登校児童の数(図3)は1996(平成8)年を境に一気に上昇していく。ピークに達した2001(平成13)年には、全国中学校に112,211人も不登校児童が存在した。社会が変容していくなかで、子どもたちと地域や親とのつながりが希薄化していった。それに合わせようと教育機関は学習指導要領を改定する。しかし現場はカリキュラムの対応に追われてしまい、不登校児童の対策を十分に取ることができなかったのではないかと。それが悪循環となり不登校児童の推移が増えたのだと筆者は考える。

## 不登校の今に迫る

また、不登校と景気不況はリンクしている。初めて不登校児童数が10万人を超えた1998（平成10）年は、新語流行語大賞トップテンに「日本総列島不況」がノミネートされている。不登校がピークに達した2001（平成13）年はITバブルが崩壊し、9.11米同時多発テロ発生により、日本はアメリカの景気悪化の影響を受けることとなる。再び上昇した2007（平成19）年にはアメリカでサブプライムローン問題（低所得者向け住宅ローン証券焦げ付き問題）が起り、株価は下落した。2008（平成20）年には、リーマンショック（アメリカでは金融危機の中、名門証券会社リーマンブラザーズが経営破綻）により世界的に株価が下落し、世界同時不況の深刻化へと向かった。このように、景気が不況な世の中だからこそ憂鬱となる。その結果として将来に夢を見られない。これらが、「不登校のきっかけ」（後述）として、多くの原因である「無気力状態」や「不安の傾向」を生むのだろう。「日本の状態＝子どもたちの精神状態」は関係性があると推測できる。

2000年以降、情報化社会の進展は、情報環境への適応を困難にする場面をもたらし、人間関係の構築に不安を覚える子どもが増加するという状況も生み出した。「長崎佐世保市女子児童殺害事件」では、当時の子どもたちの間で生じていた現状の関心を顕在化した。それは、インターネットを介した友人関係をめぐる問題である。

2004（平成16）年6月に発生したこの事件は、同級生同士による事件であった。加害者であるA子は、仲が良かった被害者であるSさんを教室と同じフロアにある「学習ルーム」に呼び出し、右頸動脈をカッターナイフで切り付け殺害した。仲が良かった2人は、A子が作ったホームページやインターネット上の掲示板で連絡を取り合っていた。当初は、仲間同士で書き込みをしたりチャットを楽しんでいた。事件の数週間前に遊びでSさんがA子をおんぶした時、「重い」と言ったことで2人にわだかまりができた。やがて、掲示板お互いが相手の悪口を書き込むようになった。それがきっかけでA子はSさんに殺意を抱き、犯行に及んだ。

中央審議会（1996）が答申を提言したように、1990年代はつながりの希薄化が見られた。だが、

インターネットという新たな道具の登場で、コミュニケーションの仕方が変わってきた。しかし、インターネット上のやりとりでは、相手の顔が見えないため、余計に言葉を直接的に受け取ってしまう。それがエスカレートしていじめになるケースが後を絶たない。平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、「学校におけるいじめの問題に対する日常の取り組み」で「インターネットを通じて行われるいじめの防止及び効果的な対処のための啓発活動を実施した」という回答が76.0%となっている。しかし、同調査の「いじめの要因」として「パソコンや携帯電話等によるいじめ」が7.8%とかなり低い数値となっている。「不登校のきっかけ（後述）」では、「インターネットの影響」や「生活リズム」の乱れなどを理由とするケースも増え、インターネットをめぐる問題はまだまだ可視化されていない。

また、2000年代から「自閉症」や「アスペルガー症候群」などの発達障害がある児童が見られ出した。これら発達障害は不登校とも隣り合わせである。塩川宏郷（2007）は、アスペルガー障害の3分の1の児童が不登校であると報告している。また、塩川は、発達障害による不登校に関してこのように考察している。

中野明徳（2009）は、不登校児童の小中高生合わせて763人を対象に調査し、小学生16.1%、中学生7.9%、高校生13.3%に発達障害があると報告している。中学生で比較的頻度が少ないのは、不登校の母体が多いことと、この年齢に到達した場合には、発達障害のある子どもは何らかの支援を受けているため分子が小さくなるのであろう。高校生で頻度が高いのは、高機能と呼ばれ、知的能力に障害がなく知能の発達が平均以上であるが発達障害を呈しているケース（ヘルスケア大学HPより）が相対的に増えるからであろう。これらの子どもは、学習困難から不登校に至る子どもが多いので、その能力に応じた個別の学習支援を行うことが不登校の予防につながる。「発達障害だからこうだ!」というような考えに至るのは同じことの繰り返しであ

り、求められているのは指導者の柔軟性なのである（塩川 2010 p9）。

1960年代の不登校は、「子供が悪い、親が悪い」という個人病理として捉えられていた。しかし、1970年代になると産業が発達し、学歴社会となる。メディアの頂点に君臨したテレビ（マスコミ）が受験戦争を煽り、ここで敗れたものが不登校となり、社会には見えない子どもとして扱われた。1980年代からは学校に行くことが「当たり前のコース」となり不登校になるものが現れる。それゆえに学校へ通う側の児童は学校へのアンチテーゼとして、暴力行為が増えた。その結果、教育現場は管理教育を進め生徒指導を強化した。暴力行為によって表沙汰になる事件は減少したが、その矛先は、いじめ問題として陰に潜むようになる。1990年代になると「不登校は誰にでも起こりうるものである」と文部科学省が表明し、不登校に至る理由については、つながりの希薄化だと説いた。また、社会に不満を持つ少年が起こした殺人犯罪が発端となり、心の教育やゆとり教育を進めていくこととなる。2000年代からはインターネッ

トが発達し、子どもたちは、大人の見えない所でつながっていくこととなる。また、発達障害などの病気による不登校の事例も現れだした。時代や社会と共に不登校は変容してきた。では現在、不登校に至る要因は何だろうか。次に2章では「不登校のきっかけ」をクローズアップしていく。

## 第2章 不登校のきっかけ

### 2-1 不登校のきっかけ

本章では、主に中学生の不登校について取り上げていく。社会的に不登校のきっかけは、いじめや体罰など原因が多いように思われている。では実際、不登校のきっかけとなった要因は何が多いのだろうか。まずは、表2を見てみよう。

文部科学省から毎年発表される「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（通称、問題行動調査）」は、全不登校生徒の「人数」「不登校の要因」「効果的だった指導」などを調査している（調査開始1966年～）。また、「いじめ」「自殺」「校内暴力」

表2. 不登校の要因

学校、家庭に係る要因 (区分)	本人に係る要因 (分類)	分類別児童	学校に係る状況							家庭に係る問題	
			いじめ	いじめを除く友人関係をめぐる問題	教職員との関係をめぐる問題	学業の不振	進路に係る不安	クラブ活動・部活動等への不適応	学校のきまり等をめぐる問題		入学・転入入学・進級時の不適応
「学校における人間関係」に課題を抱えている。	—	17,775	362	12,823	962	2,147	462	1,031	367	1,230	2,380
	—	—	2%	72.1%	5.4%	12.1%	2.6%	5.8%	2.1%	6.9%	13.4%
	18%	72.1%	46.6%	44.2%	10.2%	9.8%	36.5%	7.4%	16.8%	7.5%	
「あそび非行」の傾向がある。	—	7,503	4	625	219	1,886	253	96	2,637	207	2,988
	—	—	0.1%	8.3%	2.9%	25.1%	3.4%	1.2%	35.1%	2.8%	39.8%
	8%	0.8%	2.3%	10.1%	8.9%	5.3%	3.2%	53.4%	2.8%	9.5%	
「無気力」の傾向がある。	—	30,134	34	4,009	383	9,417	1,404	663	1,136	1,827	11,431
	—	—	0.1%	13.3%	1.3%	31.3%	4.7%	2.2%	3.8%	6.1%	37.9%
	30.6%	6.80%	14.6%	17.6%	45%	30%	24%	23.0%	25.0%	36.2%	
「不安」の傾向がある。	—	29,262	71	8,674	464	5,964	2,237	830	494	3,088	8,146
	—	—	0.2%	29.6%	1.6%	20.4%	7.6%	2.8%	1.7%	10.6%	27.8%
	29.7%	14.10%	31.5%	21.3%	28.3%	47.3%	29.4%	10.0%	42.3%	25.8%	
「その他」	—	13,754	31	1,415	149	1,684	374	209	304	954	6,595
	—	—	0.2%	10.3%	1.1%	12.2%	2.7%	1.5%	2.2%	6.9%	47.9%
	14.0%	6.20%	5.1%	6.8%	8.0%	7.9%	7.4%	6.2%	13.1%	20.9%	
計	—	98,428	502	27,546	2,177	21,058	4,730	2,823	4,938	7,306	31,540
	100%	0.5%	28.0%	2.2%	21.4%	4.8%	2.9%	5.0%	7.4%	32.0%	

（出典）文部科学省 「平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」をもとに筆者作成。

（注）中段は、各区分における分類別児童生徒数に対する割合。下段は、各区分における「学校、家庭に係る要因（区分）」の「計」に対する割合。



## 不登校の今に迫る

なども不登校とあわせて調査している。「不登校の要因（表2）」については「教職員」が回答している。（不登校新聞 2016.10/15）

不登校の原因として、一番多いのが「家庭に係る問題（32.0%）」である。「家庭に係る問題」とは、家庭の生活環境の急激な変化、親子関係をめぐる問題、家庭内の不和等が該当する。また、本人に係る要因として、多いのが「『無気力』の傾向がある（30.6%）」と「『不安』の傾向がある（29.7%）」である。「『無気力』の傾向がある」では、「家庭に係る問題（37.9%）」、「学業の不振（31.3%）」が並んでいる。「『不安』の傾向がある」では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題（29.6%）」が一番多く、次に「家庭に係る問題（27.8%）」が入る。「『あそび非行』の傾向がある」では、「家庭に係る問題（39.8%）」と「学校のきまり等をめぐる問題（35.1%）」が多い。そして、1年間でいじめによる不登校の件数が502件というのが驚きである。だが、本人に係る要因の「『学校における人間関係』に課題を抱えている」では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題（72.1%）」（子どもたちがいじめと言わないのか、学校側がいじめを認知していないのか、しないのか）が突出している。「いじめを除く友人間関係をめぐる問題（28.0%）」による不登校は、「家庭に係る問題」に次いで全体で2番目に多い。しかし、全体の結果として、「教職員との関係をめぐる問題（2.2%）」が少なすぎるのは疑問に感じる。このデータと社会的なイメージ像「不登校」はかけ離れている。しかしこれらは、あくまで「教職員」の回答に過ぎない。次に「不登校生追跡調査報告『不登校のきっかけ』」のデータを見てみよう。

## 2-2 不登校生徒追跡調査報告

表3では、「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（以下問題行動調査/学校・教職員が回答）における中学生（教職員回答）と、当時中学3年生だった不登校生徒を対象にした「追跡調査」（本人回答）の結果のうち、「不登校のきっかけ」を比較検討した。この表では、本人回答と教職員回答にかなりの開きがあり、とくに「先生との不振」では、25ポイ

ントもの差があることが分かった。不登校新聞のアンケート結果では、このような声が寄せられている。

【二者間（生徒と教職員の間で起きたこと）/暴力、暴言、体罰など】

- ・中学1年生の時、先生からの体罰や暴力があり、理由がわからない吐き気や過呼吸に苦しんだ（20代）
- ・中学3年生の夏休み。五月雨登校していたが、部活だけに登校した際、「何で部活動だけ出てくるんだよ」と先生に言われとても悲しくなった。死にたくもなった。それからずっと登校しなかった。（30代）五月雨登校とは、完全に学校へ行くことができなかつたり、部屋に引きこもってまったく出てくることがないというケースではなく、週に1日2日は学校を休むけれど、その他の日は学校へ登校している状態のことである（家庭教育支援センター ペアレンツ キャップ HP より）。

【三者間（生徒と先生とそれ以外の人物との間で起きたこと）/えこひいき、いじめの助長や隠ぺいなど】

- ・中学1年生のとき、いじめを先生に相談すると「任せろ」と言われたがいじめグループ数名を注意。以降、いじめはより悪質、陰湿なものになったため不登校になった。（10代）（不登校新聞 2016.10/15）

また、上記以外の回答について、「二者間」では「暴力」「体罰」「無視」などが多く、「ケツバットされた」「平手で殴られた」「お前が弱いのが悪いと言われた」「自分の話を何も聞いてくれなかった」などのエピソードが寄せられた。「三者間」になると、いじめに関するものが多く、「えこひいき（自分だけ怒られる）」「いじめの助長（いじめっ子と無理やり仲直りさせられて状況が悪化した）」「いじめの隠ぺい（何度も訴えたのに無視された。いじめの事実を隠された）」などである。また、年代によるエピソードに明確なちがいはなかったのである。生徒本人は教職員との関係に「原因あり」と感じていても、教職員はそのことを自

覚していないといえるだろう。平成 27 年度の問題行動調査では、「教職員との関係をめぐる問題 (2.2%)」という結果となっており、教職員が都合のいいように回答していると思えない。生徒に対して良かれと思って声をかけたり、行動に移したりしているが、かえってそれが逆効果となっているのかもしれない。また、「生活リズムの乱れ (34.7%)」や、「インターネットの影響 (15.6%)」も多く情報化社会の悪影響が如実に表れている。

現代は、「情報化・スピード化」「三間 (時間・空間・仲間) の消失」「核家族化」など、「人とかかわらなくてすむ、かかわりたくても人がいない」という環境下で日々生活しているのである。「人とかかわり不足」は、「ソーシャルスキル (対人関係の技術・コツ) が弱まる」ことを意味している。そんな中、ネット上で知り合い、つながり、生活リズムが乱れてしまい学校へ通えなくなるというサイクルが発生し、むしろ、クラスメイトや先生との関係が悪いと余計にネット上の友達と会話 (チャット) するほうが楽しいと感じている子どもがいるのではないだろうか。「社会のつながり = ネット上の人間」と考えてしまう子どもたちのソーシャルスキルの低下が、不登校を招く原因の一つであろう。

表 3. 不登校追跡調査報告  
「不登校のきっかけ」(中学校)

不登校のきっかけ (H18不登校追跡調査報告書より)	H18中3不登校生 (H26追調) 「本人回答」	H18文科省調査 (中学生) 「教職員回答」
1 友人との関係	53.7%	23.5%
2 先生との関係	26.6%	1.6%
3 勉強がわからない	31.6%	9.8%
4 部活動の友人・先輩との関係	23.1%	2.4%
5 学校のきまり問題	10.2%	3.4%
6 入学、転校、進級による問題	17.3%	3.6%
7 家族生活の激な変化	9.8%	5.3%
8 親との関係	14.4%	9.3%
9 家族の不和	10.1%	4.6%
10 病気	14.9%	7.2%
11 生活リズムの乱れ※	34.7%	—
12 インターネットの影響※	15.6%	—
13 その他	16.3%	4.5%
14 特に思い当たることはない	5.6%	—
15 その他・人に関わる問題※	—	36.2%

(出典) 文部科学省 「平成 18 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」、「『不登校に関する実態調査』平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」をもとに筆者作成

## 第 3 章 不登校の支援

### 3-1 京都市教育委員会の取り組み

本章では、筆者が行った聞き取り調査などの一次データをもとに、不登校支援を考察していく。

京都市は、臨床心理学研究の盛んであった京都大学の影響を受け、早くから学校教育にカウンセリングの考え方を導入してきた。1999 (平成 11) 年度から生徒指導課を事務局とする「京都市児童生徒登校支援連携協議会」を置き、不登校に関わる行政機関や PTA、学校関係者、大学、医療機関、NPO が一同に会し、連携を図っている。この協議会は、こどもパトナ (後述) が支援・相談機関ネットワークのセンター機能を果たす上で大きな役割を担うとともに、「不登校フォーラム」を開催するなど市民ぐるみの活動を促進している。(京都市教育委員会 2011)

京都市には、子どもたちの不安や悩み、保護者の心配や気がかりの相談に応じ、子どもたちの様々な課題の解決や自立に向け総合的な支援を行う教育総合センター (愛称: こども相談センターパトナ / 略称: こどもパトナ) が中京区に設けられている。この専門機関は、「生徒指導」と「教育相談 (カウンセリング)」、そして不登校の子どもたちの活動の場「ふれあいの杜」を一体化させた活動支援を行っている。

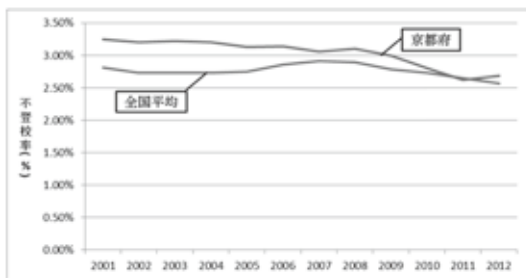
その取り組みの一つに、不登校相談支援センターがある。ここは、不登校状態にあり、在籍校以外での学習等を希望する子どもたちの活動の場に関する相談窓口である。具体的には、面接相談やセンター活動を通じて、保護者や子ども本人の意向を踏まえ、在籍校と連携しながら考えていくこととなる。その後、一人一人の状況に応じた最も望ましい支援方法を様々な選択肢の中から不登校に悩む子どもたちが、進路展望を見据え、自立心に富み、生き生きとした生活を送ることができるような後押しを進めている。

不登校相談センターの活動として、まずは、在籍校と保護者・児童生徒が何度か話し合いを重ねる。保護者・児童生徒が「当センターへ行きた

## 不登校の今に迫る

い」との旨を申し出れば、在籍校が不登校支援センターへ相談申請を行う。そして、保護者・児童生徒が当センター職員と、不登校になった経緯や現状などの話や悩みをカウンセリングする。その後、職員の判断によって児童生徒の活動の場を検討する。これは、教育相談総合パトナ内のほか、適応指導教室での学習など、児童生徒本人の状況に応じて、体験の場を設ける。また、全市立中学校、高等学校及び一部の小学校に、不登校やいじめをはじめとする児童・生徒の問題行動等に対し、子どもたちの心の居場所づくりを推進するためにスクールカウンセラーを配置している。スクールカウンセラーは、児童生徒のカウンセリングや保護者に対する助言や援助、教職員へのコンサルテーションなどの心理相談を職務としている。また、要件として、文部科学省では、臨床心理士や精神科医、大学教授等と定められており、京都市では全員が臨床心理士の資格を持つ。2008（平成20）年度には、教育分野における福祉の専門家であるスクールソーシャルワーカーの小学校への配置を開始するなど、児童生徒の心のケア、家庭や地域などの子どもを取り巻く環境に働きかける取り組みを進めている。

図4 京都市不登校率と全国不登校率（中学校）



（出典）京都府教育委員会「平成24年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（京都府の概要について報告）」をもとに筆者作成。

図4は京都市を含む京都府のデータではあるが、全国平均を大きく上回っていた2001（平成13年度）に対し、2011（平成23）年度では逆転し、支援の成果が実りつつある。また、全国的に適応指導教室や別室登校は出席としてカウントされる。「学校へ通うこと＝教室に入ること」という概念が少しずつ変わってきている。次に、京都

市が特に力を入れている不登校支援の取り組みである「不登校を経験した子どものための2つの中学校」を紹介しよう。

## 3-2 不登校を経験した子どものための中学校

京都市には、不登校を経験した生徒の学習支援のため、子どもたちが無理なく学習できるよう柔軟で特色のある教育課程を編成した新しい形の中学校が2校存在する。年間に募集は2回あり、「不登校支援相談センター」の面接相談・センター活動の後、体験入学等を経て転入学が望ましいと判断されたものが本来校から転入学するという流れである。

表4. 不登校を経験した子どものための中学校

<対象者> 中学1年生-3年生		
酒風中学校	学校名	酒友中学校
平成16年10月1日	開校年月	平成19年4月1日
770時間	年間授業時数	770時間
こどもパトナ敷地内	設置場所	旧龍文中学校敷地内
40名程度(3学年の合計)	定員	13名程度(3学年の合計)
9:20-15:20	活動時間	13:30-17:20または18:50
・教科の枠を超えた独自の教科 …科学の時間、創造工房、ヒューマンタイム、等	特色	・午後からの登校 ・夜間部生徒との合同授業・活動

（出典）京都府教育委員会生徒指導課「『子ども相談センターパトナ』を拠点とした不登校児童生徒の活動支援について」をもとに筆者作成。

## ・京都市立洛風中学校とは

不登校生徒が自立に向けて、新たに「学び」と「育ち」の場となる学校である。平成16年10月に構造特区制度を活用し、こどもパトナの敷地内に開校した。構造改革特区とは、地方公共団体や民間事業者の自発的な立案により、地域の特性に応じた規制の特例を導入する特定の区域（構造改革特区）を設け、地域経済の活性化を図る制度である。それとともに、地域における規制緩和の成功例を示すことにより、全国的な規制改革へと波及させ、日本全体の経済の活性化を図ることを目的としているのである。本来、文部科学省の学習指導要領では、中学校1学年の年間総授業時数を1015単位時間に定めている。その一方で、洛風中学校は特別な指定を受け、無理なく学習できるように770単位時間に設定されている。それにより、柔軟で特色のある教育課程が可能となりこれまでの教科の枠を超えた「新たな教科・時間」が設けられている。（社会・理科・音楽・美術・技術・

家庭科の教科や道徳・特別活動の時間は設けられておらず、これら教科の特色を生かした授業内容を「新設された教科・時間」で実施している。）

#### 【新設された教科・時間】

「科学の時間」…観察や実験を通して、発見し、驚き、興味や関心をもち、子どもたちの「探求心」を育てる科目である。個人やグループで探求し、その成果を全員が共通して理解できるようにまとめ、発表することを目標としている。（歴史・地理・文化・自然についての調査、見学、観察、実験学習など）

「創造工房」…見る、触る、聴くなどの感覚をフルに使ったさまざまな体験活動を行う。そこで得たものを活かし、工夫をして楽しく個性豊かな創造活動を手がける。（京都の伝統・文化を教材にした表現、製作、鑑賞学習など）

「ヒューマンタイム」…この教科はカリキュラムに、毎日組み込まれている。自分自身を見つめなおし、話し合いやグループ活動、交流を通じて、様々な出会いやつながりを感じながら一日のふりかえりを行う。また、健康面や安全、人権、進路のことも語り合い、考えを深め広げていく時間でもある。（仲間づくりや、野外活動、社会体験活動など）

#### ・京都市立洛友中学校とは

平成19年4月、郁文中学校跡に開校した。不登校を経験し、克服しようとする「昼間部」の生徒と、様々な事情により義務教育を修了できなかった方への教育保障を行う「夜間部（二部学級）」にわかれている。世代や国籍を越えてふれあい、学びあうことにより、生徒たちが学校の楽しさや学ぶことの喜びを実感できることを目指している。

しかしながら、フリースクールは別途費用がかかる。これら京都市の取り組みは税金で賄われているため別途費用はかからないのである。不登校の子どもたちは「居場所」を探している。京都市の取り組みは、不登校の子どもたちに「居場所」を提供するだけではなく、自己対峙するきっかけを与え、スタッフや仲間と共にみんなで創り上げていく。不登校を見つめなおし、自信を取り戻す。なにより、不登校だったことを語れる時が来れば

それは、成長した証なのである。

### 3-3 不登校の今に迫る

ここから、筆者の経験とリサーチを通して得たデータ分析により、不登校の変遷と現在を論じていく。2016年10月に筆者は京都市教育委員会のA氏と対談をした。筆者は、中学時代の1年半（中学1年生の夏休み明けから中学3年生まで）不登校経験者であり、原点回帰という意味で卒業論文のテーマとして「不登校」を掲げた。しかし、何から手を付ければ良いか分からず悩んでいた。筆者は、不登校時代のことを思い出していた。当時、適応指導教室での学習やカウンセリングを受けており、それがきっかけで在籍校へ再登校することができた。そんな時、ゼミ教員から「そのお世話になった人、例えば、スクールカウンセラーにインタビューすればいいんじゃない？」とのアドバイスを受けた。その日のうちに、筆者は出身中学校へと向かった。

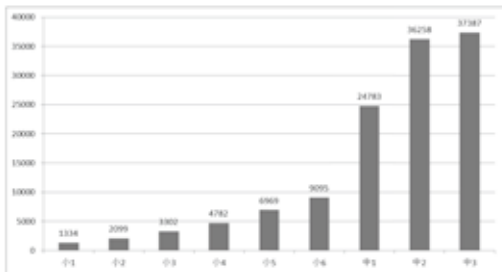
当時、校門入る一歩がどれだけが重かっただろうか。そんな思いを踏みしめながら校門を通り過ぎる。そのまま、職員室へと向かう。ガラガラとスライド式の扉を開ける。「失礼します」と一礼。あの頃の筆者が現在の姿を見たらびっくりするだろうな。そこにいたのは教頭先生だった。筆者が在籍していた当時の教頭先生とは、もちろん別人である。この日は中学校の文化祭だった。合唱コンクールを別の場所で行っているようで、職員室は閑散としていた。そのままひと通り事情を説明したが、教頭先生は苦い顔をした。「不登校」は彼ら教職員の中で、あまり好く思っていないのだと、その時感じた。筆者は一歩も引かなかった。すると教頭先生は「ダメで元々」と言い、京都市教育委員会へと連絡を取り次いでくれた。事情を説明した結果、職員の方が話を聞くということで、翌日にパトナへ向かうこととなった。

当日、エントランスホールで待っていると恰幅のよい男性が降りてきた。彼が、今回インタビューしたA氏である。電話元で聞く声は少しコワモテだったが、たいへん優しい方だった。2階へ上がりソファのある客間へと招待される。まず、「スクールカウンセラーにインタビューしたい」ということを伝えると、「それは無理だ」という

## 不登校の今に迫る

ことだった。「スクールカウンセラーには生徒との間に守秘義務がある。そして、不登校が社会的にどのように変わってきたのかを臨床心理の専門家に聞いても、答えられないだろう」とA氏から告げられた。筆者は、不登校児童の推移グラフを出して「2000年代から急激に増えたのはなぜか？」と質問をした。すると、A氏は不登校の変遷について語った。これが本論文の1章の基礎になっている。それに加えて、中1ギャップの問題(図5)も上げた。小学校を休みがちな生徒ほど、中学校で不登校になるケースが多く、これから不登校を食い止めるためには小中の連携を強化することだと答えた。

図5. 学年別不登校児童生徒数



(出典) 文部科学省 平成27年度「児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査」をもとに筆者作成

また、A氏は、登校児に「子どもたちはなぜ学校へ行くのかという」アンケートを取ったという。これは、「なぜ人びとはルールを守らないのか」を説明しようとする逸脱論ではなく、「なぜ人びとはルールに従っているのか」を説明しようとするハーシィ (T.Hirschi) のボンド理論を活用したものである。社会学者の森田洋司は、不登校を分析するにあたってこの理論を使用している。また、名古屋市立大学の原健一は森田を引用して、以下のような提唱を行っている。

子どもたちを学校へ繋ぎ止めている要因として、①対人関係によるボンド (両親、教師、友人など大切な人に対して抱く愛情や尊敬の念、あるいは他者の利害への配慮などによって形成される対人関係上のつながり)。②手段的自己実現によるボンド (学校生活におけ

る学習活動をはじめとする活動を、近未来も含めた将来の目標達成の手段として位置付けること)。③コンサマトリーな自己実現によるボンド (新しい発見ができて、学校に行くことで心が満たされるから)。④規範の正当性への信念によるボンド (学校へ行くことが、社会通念上また法律上、正しく道理にかなっていること。また、法律や社会通念が納得のいく妥当なものだという概念も含んでいる)。これら、4つの社会的絆 (ボンド) に整理している。(原 1991 p9-10)

A氏のアンケートの回答として、1番は「友達がいるから学校に行く」2番は「(内申点を取るために) 学校は勉強するところだから」3番は「学校に行くことが当たり前から」という結果だった。まさに、このボンド理論に当てはまる。A氏は口頭で答えただけで的確なデータは見当たらなかった (守秘義務だから見せなかったのかもしれない) ので信ぴょう性については不明である。

表4「不登校を経験した子どものための中学校」はインタビュー時に得た資料をもとに制作した。インタビューさせていただいたA氏並びに、京都市教育委員会、わが母校、そしてお世話になったすべての方々に謝意を表したい。

## おわりに 一不登校として生きる

不登校はどのように形を変えたのだろうか。「学校に行かない子どもが悪い」とされていた、個人病理の60年代。学歴社会の負け犬として、メディアの前に表れない70年代。当たり前コースからの逸脱、そしていじめ問題の多発による不登校が多くなってきた80年代。残虐な少年犯罪の末、学校のカリキュラムが大幅に変更された90年代。その影響により現場が混乱した。また不況の末、将来が見えない不安や無気力に押しつぶされた2000年代前半の不登校。そして、2000年代後半は、インターネットの発達により学校に行かなくても社会や人とつながることができるようになったのである。可視化されていないが、生活リズムの乱れや、ネット上のもめ事で不登校になるケー

スが多くなってきたと筆者は考える。また、発達障害による不登校の件数も多くみられ出した。社会が移り変わる中で、不登校の様態は変化してきた。しかしながら、当事者が抱える心情は変わらない。筆者が教育機関に出向き、教員から受けた顔も忘れない。10代の少女でも、20代の大学生でも、50代のおじさんでもそこは未だに共通している部分がある。アメリカは学校に行くことが損得（損になるか得になるか）であるという。それに対し、日本は尊徳である。すなわち「学校に行くこと」は、道徳的に善となり敬われ、社会的に品性があるとされる。この社会風潮や規範の正当性への信念が変わらない限り、当事者の「不登校」に対する自己否定感是不変であろう。

だが、不登校児童の受け入れ体制は整ってきたように思える。年々、全日制高等学校が減っているのに対し、通信制の高校は増えてきている。また、京都市の取り組みが功を奏し、全国平均を大きく上回っていた不登校率が現在では全国平均と並んでいる。また、別室登校や適応指導教室は出席日数にカウントされるなど、行政や教育機関には、不登校に対する寛容さが出てきたのだと感じる。

最後に、就職活動の話で閉める。就職活動の自己PRでは、ありのままの自分を表現することが大事である。面接の場で筆者は、自己PRとして不登校の時代の話をした。それが彼のアイデンティティ（私らしさ）だったからである。ある企業では、「学生時代に1週間以上連続で休んだことがありますか？」と質問されることもあった。正直に「あります」答えた。それが不正解だと知っていても。しかしながら、結果は連戦連敗だった。最終面接すらたどり着くことができない日々が続く。考え方を変えて、不登校時代の話をせずに面接に挑んだ。すると内定を獲得したのである。必死にもがいて考えて、人一倍悩んだ思春期を、企業は「不登校＝落第者」として捉える。「また逃げるのではないかと？」と疑いを抱かせてしまう。不登校のイメージはまだ社会的に良い印象ではないと肌で感じた。しかし、筆者は冒頭の千原のように、自分らしく、自分のリングを求めてこれからも歩み続ける。

## 文献

- 石井志昂, 2016, 「不登校はどう変わった? 10代と50代による当事者対談」, 不登校新聞ホームページ (2017年1月1日取得, <http://futoko.publishers.fm/article/12600/>)。
- 石井大記, 2016, 「一から学び考える不登校」, 第17回不登校フォーラム第1分科会報告原稿。
- 奥地圭子, 2000, 『フリースクールとは何か』, 教育史料出版会
- 京都市教育委員会, 2011, 『こども相談支援センターパトナ概要』。
- 京都市教育委員会生徒指導課, 2016, 『こども相談センターパトナ』を拠点とした不登校児童生徒の活動支援について』。
- 京都府教育委員会, 2013, 「平成24年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(京都府の概要について報告)」(2017年1月18日取得, [http://www.kyoto-be.ne.jp/soumu/cms/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=3480](http://www.kyoto-be.ne.jp/soumu/cms/?action=common_download_main&upload_id=3480))。
- 塩川宏郷, 2010, 「対応のヒントとして発達障害という視点を持つ—データと症状から見る発達障害と不登校」, 『月刊実践障害児教育』学研教育出版, 38(7):8-13。
- 総務省統計局 e-stat ホームページ (2017年1月18日取得, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>)。
- 滝川一廣, 2007, 「不登校はどう理解されたか」伊藤茂樹編著, 『リーディングス 日本の教育と社会 8巻 いじめ・不登校』日本図書センター。
- 竹村洋子, 2016, 「不登校も成長の道具—子供の成長は個別で、みなオリジナルブランド—」, 第17回不登校フォーラム第1分科会報告原稿。
- 千原ジュニア, 2007, 『14歳』, 講談社。
- 原健, 2011, 「不登校『問題』から教育を問う—学校相対化へのアプローチ」, 名古屋市立大学人文社会学部2011年度卒業論文。
- 不登校新聞, 2016年10月15日付, 通算444号。
- 文部科学省, 1996, 「第15期中央審議会 第一次答申」。
- 一, 2006, 「平成18年度児童生徒の問題行動等生

## 不登校の今に迫る

徒指導上の諸問題に関する調査」。

一、2015, 『『不登校に関する実態調査』 - 平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書 -』。

一、2016, 「平成 27 年度「児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値) について」。

山田恵吾, 2014, 『日本の教育文化史を学ぶ』, ミネルヴァ書房。

渡辺位, 2006, 『不登校は文化の森の入り口』, 東京 シューレ出版。